

帝キネ芦屋時代映畫

原作者 隅田 總一氏  
脚色者 小國 比沙志氏  
監督者 森本 登良夫氏  
撮影者 立花 幹也氏  
主演者 市川 百々之助氏  
霧島 直子嬢

第二五十一號

紹介 單純ながら傳説らしい雰圍氣を持つ物語を脚色者と監督者が上手に扱つて凄味と神秘的氣分を構成して居るので最後まで引き付けられた。小國比沙志氏の脚色もそう云ふ意味で大變好かつた。静哉の正體を明かにしな、のも興味を持つた。静哉の効果があつた。森本登良夫氏の監督は始終偉説と云ふ氣分を出して居た點は賞すべきものだつた。ロケーションの選定も此物語にふさわしいものであつた。フリスト・シンのラヴシーンなど好い氣分を出して居た。市川百々之助氏の静哉は久し振りで殺陣を見せない役ながら柄に嵌つて居るから難はないが見せ場が少い役なので何時も程引立たない。霧島直子嬢のお露は平凡な役ながら静哉に再會して恨みを述べる邊りの演出はなかつた。東良之助氏の小兵衛や片桐恒男氏の熊吉は相變らずの敵役ではあるが靈々しくない程度に演じて居る點が何時もと違つて居た。撮影も美しく上つて居て感心も好かつた。

山本 綠葉

興行價值——百々之助氏の出も少い、亂闘も餘り見られないから、所謂百々之助ファンは満足しないだらうが、物語としての興味は相當ある映畫である。(二月二十七日 京都キネマ俱樂部封切)